
夢×夢

HAO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢×夢

【Nコード】

N0006W

【作者名】

H A O

【あらすじ】

「ねえ。私のこと好き？」

その質問に僕は曖昧に応えてしまった―後悔するとも知らずに。

桜城高校2年、火神明。

世界が一夜にして変わることが応応してあり得る。

そして、僕のストーリーが始まりを告げようとしていた。

学園ドリーム・ファンタジー

0 終わりの夢

それはきつと遠い昔の記憶だ

場所はどこかの小さな公園のようだった

誰もいない公園で僕はアンジェリクという少女と二人っきりで遊んでいた………

「ねえ。私のこと好き？」

彼女はいつもそうだ。突然こんなことを真顔で聞いてくるのだ。

それに僕はいつも、

「っえ！？ ええと……」

素直に応えることができなかった。

「もう。意地悪くても、明あきらの事、私は大好きだよ」

「えっと、……うん……」

僕はいつも、彼女に聞こえるか聞こえないか、くらいの声で答えていた。それも、もの凄く曖昧に

でも僕は、こんなにも簡単に大好きなんて言ってしまう彼女の笑顔が好きだった。その、同じ年ごろにしては少し大人っぽすぎる悪戯な笑顔が……



「ねえ、ねえってば！！ 起きた方が良くよ明！」

遠くから突然聞こえてきたその声に少し耳を傾けてみると

「早く起きなつてば！！ じゃないと、関節技めちゃうよ！」

って、そりゃまずいだろうと思ひその声がする方向に意識を傾け

ると

刹那。目の前が真っ白に……

「やっと、起きたの？ 眠り姫の明くくん」

そこには、幼馴染の鮎沢あゆざわらん蘭がいた。

「今日の明、少し変だよ。朝から話しかけても上の空だし、5時間目の数学からHRが終わった

のに今までずっと、寝てたし……もしかして体調悪いの？」

そんなことを突然色々言われ、ふと時計を見ると3…50って・

・

「っえええー！？ なんでだよ！ 確かに全然分かんねえ方程式
見てるうちに不貞寝したとこまでは

覚えてるけど……」

「先生が教科書で明の事バンバン殴っても全然、明が起きないから
先生怒って欠席扱いにしてたよ」

しかも、6時間目なんてあの鬼の大東先生が殴っても起きない
からホントに心配したんだよ」

「そ、そうなのか！？」

「ホントに何にも覚えてないんだ」

「っえ？」

「実は6時間目は先生が急用で自習でした」でも明、今日はホントによく寝るね」まさか高校2年生になってもまだ、成長期なの？」

「ちげーよ。昨日はただ夜更かししすぎただけだよ」

と言いながらこのストーリー物語の主人公であるはずの火神ほがみ明は二つの事を思い出していた。

1つ目は昨日、俺が寝た時間だ。昨日は珍しくとんでもない強さの睡魔が襲ってきたため11…30にはベッドに入ったということ。2つ目は昨日、爆睡したにもかかわらずまた今も爆睡してしまつて、その中で見た夢に出てきた少女のことだ。アンジェリク？ 誰

だよってこれじゃ、マジで蘭が言ってたみたいに成長期でそれどころかロリコンになっちゃう。

「えー じゃあ、そんな夜更かし明君のお金で駅前の喫茶店でコーヒーでも飲みに行きますか!!」

「って、おまっちょ ふざけんなよー。 まあコーヒーの一杯くらいなら」

俺の話を遮るように

「いえーい!! じゃあ、早くチョコケーキ食べに行こうー!!」

ふと、俺は気がついた自分のクラスの男子が俺に殺気を送っていることに。おまけに女子は蘭に向かってグッドラックなどと言っていることに。

俺の本能は、無我夢中でこの場から逃げようとしていた。

「蘭。 いいか走るぞ!」

「ってええー!!? そんなにコーヒー飲みたかったの?」

ここまでくれば分かるだろう。そう蘭は天然で、もの凄く感が鈍い。

「って、明く自分で走るとか言ってすごい遅いじゃん」

そうそう言い忘れてたが、蘭は勉強ができスポーツもの凄くできる。そして俺は小学生の頃は剣道をやっていたものの、中学2年生の夏にアキレス腱を切ってから家は家で飼っている犬の散歩と体育の授業意外では殆んど体を動かしていない。

「じゃ、じゃあこの辺で止ろう。」

数十メートル走っただけで息が切れてしまう自分の不甲斐なさなど気にせずに顔を上げると、

「君達!! 廊下を走るんじゃない」

「す、すみません。」

俺の数メートル前では蘭とこの おうじょうがくえん 桜城学園の生徒会長である、 しら 白井 いひなぎく 雛菊生徒会長が話していた。

「全く、君達二年生だろう? もう少し行動に恥じらいを持ちたまえ」

「は、はい」

「その、運動音痴君もだ！ 次見つけたらこの我が愛刀、正春まさはるが黙らないぞ」

そう言っ
て持っていた木刀を俺の方に突き出してきた。

「あ、あの俺は決して運動音痴などでは・・・」

「五月蠅うるさいい！！ まあ、良いだろう。今回はこの辺で許してやる。
だが、次私の前で校則

を破るようなら、この我が愛刀・・・って君達！！ まだ私の話は終わっていない！！ それに廊下
は走るな！！」

「あれが今回の『クロノウサギ』だと思えないな正春・・・」

「・・・預言は絶対だ・・・」

「ああ 知っているさ・・・」



「もう まだ、生徒会長さん喋ってたのに」

「いいのいいの。 あんなの真面目に聞いてたら日が暮れちゃうぞ」

「あ、そーだった！！ コーヒー飲みに行くんだったよね！」

「忘れてたんかい！！！」

「えへへ」

「でも、明の迷惑じゃなかった？」

「んー？ 問題ないよーせ空から女の子が落ちてくるような予約入ってないし」

「ええー！ー！？ 空から女の子が落ちてくるの？ 大変だよ助けてあげなきゃ！！」

「じょーだんだよ」

なんて言いながら、もう周りから見たら付き合ってるようにしか見えない俺らは、たわいのない雑談をしながら駅前の喫茶店に向かっていた。

少し冷静になって、蘭を見ると髪は少し茶色みがかったいるセミロング。顔は少し幼顔で、目は垂れ目だ。そして、全体的にみるともの凄くと言うほどではないが、可愛かった。そんな蘭と一見カップルに見える俺は幸せ者かもしれないと少しだけ思った。だが、幼馴染として一緒にいた蘭になぜか俺は恋愛感情を抱けなかったいや、抱けなかったのかもしれない。

「もおー さっきからなに私の事ばかり見てるの？ 明のエッチい」

「そんなじゃねーよ あ、ほら喫茶店だ。 この辺はうちの学生が多いから気おつけろよ」

「話逸らしたー ますます怪しいですなワトソン君。 でも、何に気おつけるの？」

「ワトソンって誰だよ。 んーなんでもいいから、あんまり目立つなってこつだよ」

「あは。 誰だっけ？」



そこまで、広くない喫茶店ではあるがなんでもマスターがうちの学校のOBとかだそうで、桜城の生徒の御用達なのだそうだ。

「注問決まったか蘭？」

「んーとね ミルクティーとチョコケーキとチーズケーキとイチゴのタルトと・・・」

「まてっ！！ マスター コーヒーエスプレッソとミルクティーとチョコケーキをお願いします」

「えー！ なんて、チーズケーキとイチゴのタルトはー？ 明のけちー。 そんなんだから、」

刹那。蘭の話を遮るかのように俺の体が炎に包まれた。いや、炎に包まれているのは自分だけじゃないだろう。周りからはホラー映画を見たときに上げるような驚きや叫び声と違い、うめき声が聞こ

えてきた

すると、それを笑うように男の声が聞こえてきた。違う正確に言う
と頭の中に響いてきた。

「あーあー 聞こえてるよね？ 人間の皆さん？ えーっと今から
人間の皆さんには死んでもらいまー す 恨まないでねー人間
の恨みは神をも殺せるから」

男がそう言うのと、一気に体が消えていくのがわかった。



「ねえ、ねえってば！！ 起きた方が良いよ明！」

遠くから突然聞こえてきたその声に少し耳を傾けてみると

「早く起きなってば！！ じゃないと、関節技きめちゃうよ！」

って、そりゃまずいだろうと思ひその声がする方向に意識を傾け
ると

刹那。目の前が真っ白に……

「やっと、起きたの〜？ 眠り姫の明く〜ん」

「って、あ、あれ？ 夢？ でも、確かに体が、それにあんなにリ
アルな夢ってあるかあ！？」

「どーしたの？ さっきから独り言が激しいよ？ 体調悪いの？」
おかしい。絶対におかしい。蘭の言っただことはことさっきの夢の中でも
聞いた。ふと時計を見ると3…15

「HRの前？」

「もおー HRの前？ って明、5時間目から今までずっと寝てた
人のセリフ？ 6時間目は鬼の大東先生が……」
遮るように言う

「自習だったっけ？」

「っえ！？ 起きてたの？」

「いや、なんとなくだけど……」

「何んとなくって、もう5時間目は明が起きないから先生怒って欠

席扱いにしてたよ」

「ご、ごめん。体調悪いから先帰るわ。先生に言っといてくれない？」

「い、いいけど・・・体調悪いなら一緒に保健室行こうか？」

「大丈夫だよ。ありがとう」

「で、でも明の事が心配だし・・・」

「大丈夫だって言ってるだろ！！」

「・・・なんで怒鳴ってしまったのだろう・・・」

「ご、ごめん」

「・・・分からない。でも、急がなければ・・・」

0 終わりの夢（後書き）

初めまして！ 夢×夢のスタートです。

今回はやはり、最初の部分と途中の生徒会長の部分がポイントですかね

1 聖地の見た夢

アキラが数学の授業で方程式がまるで分からず不貞寝を始める少し前、桜城学園の生徒会は世界の滅亡を食い止めようとしていた・・・

「会長！ 異常な魔術的波長（＝魔方阵）が世界を覆い始めました！！」

「なんだと！？ だが、全世界を覆えるほどの魔力を使える奴などこの次元には限られているはずだ。それに、そいつらの封印と監視は《狂った魔神信仰者》が徹底してるはずろ？ 別次元からの干渉も考えにくい・・・誰の仕業だ？ 亜由美はそのまま、魔方阵の監視と術者の特定をしてくれ！！」

「わかりました！」

彼女は桜城学園生徒会書記の麻倉 亜由美、正春の力を使わなかったら私でも、彼女の魔術に対する知識と情報処理能力では負けていた。

自分の中に意識を集中させた私は愛刀である正春の封印を解くための術式を展開させていった・・・術式の言語化を開始する

「アルバ・カシータ・エトリフィリノ・・・」

その言葉を私が言い終わると同時に、正春に封印されていた英雄^{ケレ}の神の力と知識が私の中に流れてくる。

「正春。《道程》を開くぞ。行先は漆原姉弟のところに行く！」

「・・・了解・・・」

正春が言うと同時に目の前に大人1人分くらいの大きさの亀裂が空間に入った。その亀裂の向こう側に行くと、そこは普通の家のリビングで漆原 夏と 冬の姉弟が一生懸命にいわいる、同人誌を描いていた。

「姉貴！ 雛菊姉ちゃん来たぜ！！」

「んあ！？ おお！！ 雛菊か！ わりーな今締め切りが近くて、茶も出せねーよ」

こいつらのテンションはいつも疲れる・・・

バカ姉の夏は真面目に私の話を聞いてくれた記憶が無い

「仕事だ！！ お前らも気が付いているだろう。 この魔法の起動を早く阻止しないと、世界が滅びるんぞ！」

「いいぜ、別に。 人間の世界が滅びようが私らエルフには関係ないからな」

「そー言うことだから、諦めてよ雛菊さん」

くそめんどくさい。このバカなエルフ姉弟を説得するほどこの世界には時間は残っているのだろうか？。

「1つ聞け。 この世界が滅びると言うことは、お前らのくだらない同人誌を読む奴がこの世から消えるってことだぞ」

私がそう言った瞬間。バカエルフの姉弟が声をそろえて

「それは困る！！！！」

「では、お前らにはこの魔方陣の解呪を頼む。 スベル・ブレイカー 封・解呪師の力見

せてもらおうか」

「おうよ！！」

「りょーかい！！」

姉の夏はいつも強気なのだが弟の方は常にニコニコして優しそうな印象だった。

「正春。 次の道程を開けてくれ 行先は ルウン 《聖地》の本拠地だ」

「・・・了解・・・」

すると、また空間に亀裂が走った。その道程の先は少し暗いが会議室のような場所だった・・・

そのころアキラは爆睡をしていて、人に言ったらちよっと恥ずかしくなるような幼いころの記憶のような夢を見ている最中だった・・・



「やあ。久しぶり雛ちゃん。いや、今は《聖人》の一人として来たんだよね？」

ルウンのメンバーの事を聖人と言うそうだ。この男はルウンのトップメンバーと私たち桜城学園生徒会を繋げる役目をしている、^{アラ}羅夢・バロンと言う3代前の桜城学園生徒会長だ。若いのにファッションのつもりか、髪の毛は白く、いつも片目だけの丸メガネをしていて黒のカーディガンと言う老人を連想させるような容姿の男だ。「あなた達なら、この異常な魔法を止めることも簡単にできるはずですよ？ なぜ止めないのですか！？」これも預言だとおっしゃりたいのですか？」

「いつになく強気だね雛ちゃん。そんな君に特別に教えよう。そうだ。これもルウンが解読できた預言の一部にすぎないけど、今日で世界は一回滅びる―」

「そ、そんな・・・！！」

「今更驚くこともないだろう？ 君だってこの世界が滅びるのを2回ほど見てきただろう？ そして、今回は『クロノウサギ』が目覚めます。それは君にも説明しただろう？」

「しかしそれは・・・！！ 『クロノウサギ』が目覚めた場合ですよ？ そんな世界の運命をなんの力も無い少年に託すなんて・・・」

「その言葉『なんの力も無い』って言うの僕からしたら君達生徒会も同じなんだけど。それに、面白いじゃないか。平凡な人生を送ってる高校生の手に世界の運命が握られてるなんて。それに、この魔法は僕たちルウンのトップでも知らない次元の術式だ。解呪はそうとう困難だろうねえー。雛ちゃんのお友達のエルフ達でも無理だと思うよ。あ！ 言い忘れてた。この魔法の術者は君のお兄さんであるニア君だよ」

「っ・・・！！」

私は無力だ。兄であるニアに殺されないために今まで力をつけてきた。だけど、今日ここで一回兄に殺される。でも、私は何事もなかったかのようにこれからも、ルウンの駒として生きていくだろう。なぜなら兄は私に『雛ちゃんの命は今回は取らなかったけど10年たったら新しい契約のために悪魔に雛ちゃんの命を食べさせに行くよ。』そう兄が言ってからまだ、9年と349日間しかたっていない。つまり私にはまだ1週間だけ命が残されている……几帳面な兄の事だからきつとびったり10年後に来るに決まってる……

私はそう信じた。そうしなければ、このまま兄に殺されれば全てが、この10年間が無意味になってしまうから……

「そう言う訳だから、諦めてくれるよね？ 雛ちゃん？」

「……はい……」

少し間が空いて……私とアラムの体が炎に包まれた……

「あーあー聞こえてるよね？ 人間の皆さん？ えーっと今から人間の皆さんには死んでもらいまーす。 恨まないでねー人間の恨みは神をも殺せるから」

確かに兄の声だ……

「また後でね。雛ちゃん……」

アラムがそう言い終わった時、私達の体が消えていった……



私が目を覚ましたのは、生徒会室の会議用の机に顔を伏せた状態でだった。亜由美もそばで気絶していた。

「おい。 おい起きろ！ 起きろ亜由美」

「うんー！ はっー！ 会長、『クロノウサギ』は目覚めたんですよ？」

「ああ。 そのようだな」

私は亜由美にそう言いながら、自分の中に意識を集中させ正春の封印を解くための術式を展開させていった・・・術式の言語化を開始する

「アルバ・カシータ・エトリフィリノ・・・」

その言葉を私が言い終わると同時に、正春に封印されていた英雄^{ケレ}の神の力と知識が私の中に流れてくる。

「亜由美。 私はアランのところに行ってくる。 お前はあのバカエルフどもの所に行って、今回どんな働きをしたのか聞いてきてくれ。 それとルウンから書類が無駄に大量に来るからそれを要約しといてくれ」

「わ、わかりました!!」

「正春。 道程だ・・・」

「・・・了解・・・」

その道程を通り、またさっきの暗い会議室に出る。

「やあ、待ってたよ雛ちゃん。 このまま一緒に来てくれるかな？ ルウンの会議に君にも出てほしい」

「その前に《死者を狩る者》^{しにかみ}についての資料が欲しい」

「《死者を狩る者》？ それは珍しい。 分かりました生徒会室に送らせてときましよう。 でも、なぜです？」

「家に、預言の一部があったんです。 そこに『クロノウサギ』は《死者を狩る者》^{しにかみ}と恋に落ちるとあったんです。 黙っていてすみません」

「いえ、その程度の預言ならオリジナルがルウンに保存してありますから問題ありません。 では私たちは会議に向かいましょうか」



その頃、アキラは走っていた・・・
場所はある夢の中に出てきた公園だ。 なぜだかは分からないが誰

かが待っている気がした。それに俺を待っているその誰かは、ひどく長い孤独を抱えている気がしたから……

「……ハアハア……たしかあの公園って俺の家から歩いて10分くらいだったよな？」

誰かが応えてくれる訳では無い。でも、俺には確かな確信があった。

「……ハアハア……やっぱり、あの夢の公園はここだ……！！」

この公園の近くには、ここよりも大きくて遊具も充実している公園があるためか、アキラが会いに来た誰かがだけでなく、子供も一人もいなかった。桜城からここまで走って約30分の距離のはずだけど、

「俺やっぱり体鈍ってんのかな？」

明はここまで、本気で走って50分もかかったからだ。

刹那。聞き覚えのある声が公園に響いた。

「やあ、人間。君が今回の『クロノウサギ』かい？」

男の声は人をあざ笑うようで、とても冷たく響いた。男は公園の中にあるジャングルジムの上あたりに浮いていた。

「お前さっきの、頭に話しかけてきた奴だよな？　なんで浮いてんだよ？　マジックか？　『クロノウサギ』？　あいにく俺は普通の人間だぜ？」

「へー。自覚してないんだ。それに悪魔も見えてないのか」

俺は逃げる用意をしていた。なんせ本能ってやつが俺に、まだ死ぬな逃げろって言うてる気がしたから。

「全く今日はホントに変な日だぜ。分かんねーけど聞こえた気がするってだけで変な声に反応して体が勝手に動き出すしな」

「君の話に興味は無いよ。それより君、死んでくれる？　まあ答えは聞いてないんだけど」

奴はそう言うと、手のひらをこちらに向けてきた……

「光よ」
アルバトーン

刹那。こちらに向けられた手のひらから、白い光のようなものが真っ直ぐに俺の心臓をめがけて飛んできた・・・

「制^{アルト}止！！」

その声を聞いた瞬間、自分でも気づかないうちに失っていた記憶を、一瞬にして取り戻した。

その記憶は2倍速で再生したDVDのように少し汚い映像だった・・・



やっぱりあれは夢じゃなかったんだ・・・！！

舞台は8年と少し前、俺は学校でイジメを受けていた。理由は確か、ささいなケンカから発展した気がする。その頃の俺は小学生3年とは思えないほどの世に絶望していた。イジメが特にひどい日は仮病を使って早退したりもしたのだけれど、いずめられてるなんて恥ずかしくて親や先生に相談なんて言う勇氣は無かった。そして、早退した俺は家にも帰れずに幼稚園児やその親がいる大きな公園に自分の居場所が無いことを確かめると誰もいない小さな公園に逃げ込んでいたのだ。

だが、その日は違った。慣れた感じで早退した俺は罪悪感など、みじんも感じずいつもの公園に向かった。その公園にはジャングルジムとブランコと滑り台が一台ずつあったのだが、今日は先約があった・・・

ブランコの上で泣きながら、とても人間とは思えないほど可愛い同い年くらいの女の子が座っていた。

「ねえ。君はなんで泣いてるの？」

「あなた、私が見えるの！？」

「っえ！？　だって君は僕の前にいるし。君も一人なの？」

「そう。　あなたも一人なんだ・・・一緒に　私はアンジェリ

ク。あなたは？」

「あんじえりく？ 海外の人なの？ 僕は火神 明って言うんだ」

「海外に近いところ。アキラ。アキラ。アキラ。」

「うん！ 友達になってくれる？」

「トモダチってなに？」

「一人じゃないってことだって誰かが言ってたよ」

「いいよ。じゃあ、アキラは私のトモダチだ！！ 私のアキラのトモダチ？」

「もちろんだよ！ アンジェリクは僕の友達だよ！！」

それから僕とアンジェリクは友達になって、いっぱい遊んだ・・・

どこで、覚えてきたのかある日アンジェリクは

「ねえ。私のこと好き？」

「っえ！？ ええと・・・」

素直に応えることができなかった。

「もう。意地悪くても、アキラの事、私は大好きだよ」

「えっと、・・・うん・・・」

僕はいつも、彼女に聞こえるか聞こえないか、くらいの声で答えていた。

その後も嘘のように時間は早く過ぎて言った。

あの日までは・・・

「ねえ。私のこと好き？」

彼女はいつもそうだ。突然こんなことを真顔で聞いてくるのだ。それに僕はいつも、

「っえ！？ ええと・・・」

素直に応えることができなかった。

「もう。意地悪くても、アキラの事、私は大好きだよ」

「えっと、・・・うん・・・」

僕はいつも、彼女に聞こえるか聞こえないか、くらいの声で答えていた。それも、もの凄く曖昧に

でも僕は、こんなにも簡単に大好きなんて言えてしまう彼女の笑顔が好きだった。その、同じ年ごろにしては少し大人っぽすぎる悪戯な笑顔が……

刹那。轟音と共に公園の中の空間が歪んでいくのがわかった。

「アキラ！！ 逃げて！！」

歪んだ空間から出てきたのは映画なんかで出てくる西洋の鎧を身にまとった騎士達だった。騎士の一人が言った。

「私達は《教会》の人間だ《死者を狩る者》を封印しに来た。魔神復活の生贄になってもらう」

「《狂った魔神信仰者》が私を封印？ 笑わせないでよね。ろくに道程も使えないみたいね」

その時僕は思い出した。彼女にはもう力が無いということ……

彼女は逃げていたんだ。《死者を狩る者》って言うのは、本やマンガに出てくるようなのと違って、もの凄く大きな力を動かせる神様だってアンジェリクが言ってた。そしてその力を狙って、いろんな世界の人間や悪魔なんかに襲われたらしくて仲間もどんどん減っていつて、それで自分自身に『孤独』って言う魔法を使って永遠の孤独を約束する代わりに全ての者に存在を覚られなくなるんだって言ってた。なのに僕の目には彼女の姿がはっきり見えたんだ。そして、アンジェリクは言った

「アキラの中に私の力の殆んどと《死者を狩る者》の証を隠すね！！」

彼女は確かにそう言った。つまり彼女は今、空っぽなんだ……

気がつくと僕はアンジェリクの手を握って走っていた

「ダメ！ アキラだけで逃げるの！！」

「嫌だよ。嫌だよそんなの！！」

「お疲れ様。小さな騎士さん」

その声はさっきの騎士の声と同じだった……

その後の記憶はあいまいだ……

「アキラだけは助けて」と言うアンジェリクの声と僕が何かを叫んでいる声、騎士の服装の人が言った君の 記憶を消すと言った声……

僕が目を覚ますと公園にある滑り台の階段に、もたれるように座っていた。

「……っう!!……」

ひどく頭に一瞬もの凄い痛みが走った……

僕は何事もなかったかのように、家に帰った。大切な物を置き去りにして……



突然DVDのように再生された記憶から周りに意識を戻すと白い光のような物は俺の心臓の約5センチくらい前で止っていた……

「ん？ 誰だい？ 僕の邪魔をしたのは？」

「アンジェリク!!! どこだ!?! アンジェリク!!!」

俺は知らないうちに叫んでいた。

「ここだよ。 アキラ」

ジャングルジムの右の方にあるブランコのあたりに彼女はいた……

それは陶人形のように美しい顔立ちで髪の毛もまた美しく、金色に輝いていた。身長は150くらいと思われ、絹とレースをふんだんにあしらった昔の西洋のをイメージさせるような服に身を包んでいて俺と同じ年頃の少女がいた。

「アン、ジェリク」

「あゝ。 君は《死者を狩る者^{しにがみ}》か……正気を保ってる奴は始めてみるな」

気がつくときアンジェリクは俺のすぐ横にいた

「っえ!?! なんでここに居るの?」

「あは。それはね、アキラのことが大、大、大好きだからだよ。ところでアキラ、何物なのあいつ?」

「これは失礼しました。《死者を狩る者》とクロノウサギよ。しにかみ

僕はニアって言うんだ。この世界を統べる、《月の住人》らせんぞくの使いとして来ました」

「螺旋族……!!!!」

「どーしたんだよ? アンジェリク」

「アキラ、こいつヤバイ。逃げて……怖い。怖いよアキラ!」

また俺は逃げるのか? それも彼女を置き去りにして……

「ね。二人で盛り上がってるところ悪いけど、僕は君達を殺すつもりないんだけど」

「っえ!?! でも、さっきあなたアキラの事を殺そうとして……」

遮るようにニアと言う男が言う。

「確かに。でも、それは君が出てくる前の話。君が現れたのなら話は別だよ。君がクロノウサギを育てるのなら、別にそいつを殺す理由はなくなる。むしろ、君が育てるのならその方が安心できるからね」

「私が? アキラを育てる? なぜ? アキラは私が守る」

「その空っぽな体でこれからクロノウサギに降りかかる約災を振り払えるんです? まあ、君がこの提案を断るなら今ここで、クロノウサギが死ぬだけだね」

「待ってよ!!! 私がアキラを育てれば、そ、そうすればアキラは死なないの?」

「うん。月が満ちるまではね。そこから先は誰も知らないよ……」

「わ、分かった……分かったから早く消えてよ!!!」

「うん。僕もそのつもり。あと月が満ちるまで安心して言うのは、僕たち螺旋を持つ者が殺さないと言う意味だからね。じゃあ、一週間あげるからその人間を最低でも3流悪魔並みにしてあげてね」
「……っ!! わ、分かったわ……」
「では、一週間後にまた会おう《死者を狩る者》とクロノウサギよ」
そう言って、ニアとか言う化け物は消えた……
「あのー アンジェリク。俺さっぱり理解できてないんだけど……」

「大丈夫だよ!! 大好きアキラ!」
「っえ!!? ええと……」

俺はまた素直に応えることができなかった。
そう。また……

「アキラ!! アキラに力をあげる!」
そう言うのと彼女は俺をかがませて、突然俺にキスをした……
って、ええ!!!! だけど声が出ない。彼女が前にいるから。

「はい。終わり」

「っえ!!? でも何も変った気がしないんだけど……」

「アキラの中の力を私に戻してそこからアキラでも使えそうな力をアキラに植えたの」

「植えた?」

「うん。人間は使い魔と契約するか、武器を持つか、魔術を身につけるか、力を植えるかでしか自分たちの枠を越えられない」

「へー。ねえ、俺に植えたって言う力はどんなもの?」

「自分の中に意識を集中してみて」

「わ、分かった」

自分の中に意識を集中すると、さっきアンジェリクに突然キスされた事を思い出してしまいもの凄く恥ずかしい事だったと今更、気がついた……

っん!? 自分の中に見たこともない文字の羅列があった。そし

て、そんな意味の分からない文字がなんとなくだがアキラには読めた。

「アンジェリク。なにこの文字？」

「まだ、読まない方がいいよアキラ！」

「っえ!？」

「文字が最低限理解できるように少しだけ私の知識を残しておいたんだけど、意味も分からずに読んだらアキラ呪われちゃうから・・・でも、アキラは私が強くするよ!!」

それは俺にとっての希望だった。あのニアとか言う化け物や他にもアンジェリクを狙う者達から今度は逃げなくて済むかもしれない。アンジェリクを守るかもしれないと思ったから・・・



桜城学園の生徒会長、白井しらい ひなぎく雛菊は、ルウンでの会議が終わった後、生徒会室で上への報告をするために書類を書いていた・・・

「ん〜!! 眠い。ちょっと寝るか〜」

すぐに睡魔が私を眠りへと、いざなった

―そこは、暗くて深い孤独の底の底の底。一人の女の子が泣いていた。彼女の名前は。今ではを務めているが、それは単なる表向きの設定だ。その雛菊の過去のこと・・・

「なんで!？ なんでなのお兄ちゃん？」

私の家は代々《聖地》ルウンと言う世界に複数ある魔術結社マジックキャベルのなかでも、最も欲深い愚かな人間の集った機関に属していた・・・

私の通っていた小学校は今日たまたま午前で授業が終わり、お昼ご飯のために帰路を急いでいた。

「ただいま〜!」

しばらくたっても返事が無い・・・すると、リビングの方から

「やあ、雛ちゃん。おかえり」

それはどこか、人をあざ笑うような声だった。私はその声の主を知っていた。実の兄だ……でもその声はいつもの優しい兄、ニアの声とは思えないほど冷たかった……。私はリビングへ急いだ。そうしなければいつもの兄が永遠に失われてしまう気がしたからだろう。

「お、お兄ちゃん!?」

私がリビングのドアを開けた瞬間、鼻を突く嫌な匂いがした。人間の血の匂いだ。そして私の目に一番最初に飛び込んだものは父に内緒で兄が見せてくれた不思議な本に出ていたいわゆる《悪魔》だった。それは、動物園なんかにいるライオンくらいの大きさで、姿もライオンに似ているが背中あたりから真っ黒な翼が生えていて、尻尾は蛇のような生き物だった。兄が、《悪魔》について書いたあった本を私に見せながら、

「お父さんの書斎から無断で持ってきたから、内緒でね」

と言っていたのを思い出した。そして、その《悪魔》が何かを貪っていた。それが優しかった母や父であることは、頭の良かった私にとっては簡単に予想がついた。

「雛ちゃんにはこいつが見えるの?」

「ああああああああああ!!!!!!」

私にそのあとの記憶はない。

気がつくところには知らない天井。どこかの病室だろうか? 小さな部屋だが壁全体が白くまわりは何もないこの部屋にあるのは今私が寝ているベッドだけだろう。少し体を起こすと、漆黒の髪に同じく漆黒の瞳をした中学生くらいの少年がこちらを見て薄い笑みを浮かべていた。兄のニアだ。

「ああ。 やっと気がついたのか雛ちゃん。 僕の妹ならもう少し強くなってもらわないとな」

刹那。その声を聞いた瞬間私は全てを思い出した。

「お、お兄ちゃん。 お、お母さんとお父さんが……!!」

お兄ちゃんが私をあの《悪魔》から守ってくれたの？」

「《悪魔》？ あーあれね。 あれは僕の使い魔だよ……」
私にはその言葉の意味が分からなかった。

「僕はもう主の所に帰らなくちゃいけないから行くよ？ この空間から出るならその《道程》^{みち}を通れば家に着くから。 あ、そうだ言い忘れてた。 雛ちゃんの命は今回は取らなかったけど10年たったら新しい契約のために悪魔に雛ちゃんの命を食べさせに行くよ。」

そう言うとニアは指を縦に軽く振り、道程を開いてどこかえ消えた……

「なんで！？ なんでなのお兄ちゃん？」

後の私は父の書斎にあった一般人が読んだら発狂するような魔導書を読みあさり、バチカンの地に封印されていた英雄の神であるケレサスパの封印を解呪して契約を交わした……

—《狂った魔神信仰者達》《バチカンのやつら》に追われることにはなったが、ルウンの犬になることを条件にルウン守られている



「会長ー 会長！ 起きてください」

「おい。 起きろよ雛菊」

「起きてよ。 雛姉！！」

「ん…… はっ！！ 寝てしまったようだな」

目を覚ますと、亜由美となぜか漆原姉弟がいた……

「なんで、お前達がここにいるんだ？」

「大変なんですよ！！ 会長！！」

「そーなんだよ。 俺の同人誌が……」

「姉貴！！ 違うってば！！！」

全く、寝起きからこのバカエルフの夏のテンションは苛々する……

「うるさーい！！！！ 似たような事をなんでも言うな！！ 特に夏！！ お前は黙れ！！！！ で、何があったと言うんだ？ 亜由美・だ・け・で・説明してくれ！！」

「そ、それが会長・・・・・・・・・・ 《死者を狩る者》^{しにかみ}が転校してきました！！！！」

「な、なんだと！？・・・・・・・・・・」

1 聖地の見た夢（後書き）

どーもH A Oです。 思っていたより長くなってしまった2巻ですが読んでいただきとても感謝しています。一気にキャラが増えてしまいました。追々、解決する予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0006w/>

夢×夢

2011年9月27日03時17分発行